

金子光晴の児童文学作品研究

— 「戦争」の表象を中心に—

洪 瑟 君*

一、はじめに

金子光晴は一般的には「詩人」として知られているが、意外にも彼は子供向けの作品を多く執筆していた。彼は成人向けの詩集だけでなく、何十篇もの子供向け作品も手がけていた。光晴が子供や少年少女向けに執筆した作品は大正13年から昭和18年までの間に発表された。この時期は彼の人生で最も波乱万丈な時期であり、長男の誕生や婚姻生活の破綻、南洋やヨーロッパへの放浪、そして戦争などが重なっていた。そのため、金子光晴を研究する際には、彼の子供向けの作品に対する研究は無意味ではないと考えられる。しかし、現在でもこれらの作品は彼の仕事の傍流と見做されて、あまり注目されていないのが実情である。

金子光晴の子供向けの作品は、昭和18年に出版された絵本『マライの健ちゃん』以外は、主に大正13年から昭和16年までの期間に発表されている。これらの作品は『少年倶楽部』、『少女倶楽部』、『婦人子供報知』といった子供向けの雑誌で発表されたのである。作品の内容を見ると、主に童話が多く、次に紹介文がある。しかし詩人である光晴の得意とする詩の作品は意外に少ない。また、童話の舞台設定は主に西洋が中心であり、日本や中国を舞台にした作品はほんの僅かである。一方、紹介文の場合は、世界各地の児童の生活や珍しい出来事などを紹介するものが中心となっている。

現在、金子光晴の子供向けの作品は主に『金子

光晴全集』（昭和51年、中央公論社出版、以下『全集』と略称する）の第8巻「童話」、及び第15巻「雑纂」に収録されている。童話、詩、散文など幅広い形式で書かれた子供向けの作品に対して、本稿では作品の初出と文体¹を基準にしてそれらの作品を「児童文学作品」と称する。『全集』には、既知の約60篇の児童文学作品以外にも全文が収録されていない作品が8篇ある。さらに、当時雑誌に発表されたが『全集』には収録されずに『全集』の年譜に記載されていない作品も存在する。現時点での調査では、合計81篇の作品が存在するとされている。

二、先行研究

光晴の児童文学作品についての先行研究は、主に『全集』に収録されている作品を中心に論述したものである。宮澤賢治は光晴の約60篇の童話を、その内容に基づいて「場所・人名由緒、起源もの」「自己犠牲的少女もの」「娘（兄弟）二人もの」「忠義もの」「教訓もの、または親孝行もの」「神への礼拝もの」「正義もの」「恩返しもの」「軍人精神もの」「母子愛情もの」「トンチもの」という11カテゴリーに詳細に分類した²。その中で注目すべきは、「軍人精神もの」というカテゴリーが存在することである。「軍人精神もの」とは、兵士や軍人を主人公とし、戦争が背景に描かれた物語を指すことが一般的である。ただし、宮澤氏がその作品の内容について具体的に分析していないため、詳細な内容は明確ではない。しかし、「軍人精神

*台湾大学・副教授

もの」が独立した項目として取り上げられていることから、光晴の童話の中には戦争を背景にし、兵士や軍人を主人公とした物語が相当数含まれていることがわかる。

また、暮尾淳は光晴の子供向け作品を分析し、登場人物が「えい知、愛情、勇気、自己犠牲」などの徳性を持ち、快活で可憐、爽やかな性格である点を指摘した。彼はまた、物語の筋には常に「戦争や権力者の横暴や近しいもののよこしまな心」などの要素があり、「主人公が一度死の危機に瀕しても結局救われる」という特徴を指摘した。そして、光晴の西洋を舞台とした童話は「人間愛の啓蒙」を意図していると主張した³。暮尾淳の論述に対し、馬渡憲三郎は光晴の童話について、「舞台設定や時代設定において、表出しようとしたものは、〈愛国心〉や〈祖国愛〉であり、それを基盤としての〈人間愛〉という主題である」と述べた。彼はまた、その主題が「表出されてくる〈時空間〉が〈戦争〉や〈戦場〉でなければならなかったという〈必要性〉」はやむを得ず「時代や社会の〈制約〉」に侵犯された結果だが、光晴は〈表現者〉としての責任を問われるべきだと主張した⁴。

更に、趙怡は光晴の児童文学作品について、「物語の舞台がほぼ西洋であること」「1937年前後を境に作品の内容を変化すること」「従来の西洋批判と異なる姿勢を取ること」など幾つの特徴を取り上げた⁵。ここでの「1937年前後を境に作品の内容を変化すること」というのは、1937年前後以降、戦争を背景とする愛国少年少女を描くものが一気に増えたということを指す。そして趙怡はこのような戦争や愛国精神を正面から捉える作品を多く書いたことによって、光晴の抵抗詩人としての「知られない一面」と指摘した。

つまり、時代背景の制約により、光晴は作品の中で「戦争」を描写せざるを得ない状況に置かれていたかもしれない。しかし、子供向けの作品において戦地や戦争の描写が頻出していたことは、

光晴が本来持っている「反戦詩人」や「抵抗詩人」というイメージと一致しないと感じさせる要素となり、読者にとって矛盾を感じさせるものであった。しかし、光晴の作品における「戦争」は一体どのような意味を持つのだろうか。果たして光晴は国策協力のために「戦争」を大量に児童文学作品に取り入れ、抵抗詩人としての知られざる一面を示したのだろうか。

光晴は戦後に発表した作品「詩人」において、自分の詩集『鮫』について次のように述べている。

『鮫』は、禁制の書だったが、厚く偽装をこらしているのだから、ちょっとみても、検閲官にもわからなかった。鍵一つ与えれば、どの曳出しもすらすらあいて、内容がみんなわかってしまうのだが、幸い、そんな面倒な鍵さがしをするような閑人が当局にはいなかったとみえる。なにしろ、国家は非常時だったのだ。わかったら、目もあてられない。「泡」は日本軍の暴状の曝露、「天使」は、徴兵に対する否定と、厭戦論であり、「紋」は、日本人の封建的性格の解剖であって、政府側からみれば、こんなものを書く僕は抹殺に価する人間であるわけだ⁶。

光晴の話によれば、戦時下の文学における言説が作家の本心を表せるか否かは疑問の余地が残る。少なくとも光晴自身の場合、詩という文体の抽象性を利用して、作品が国策に協力した文章のように見えるような手法を用いるなど、隠蔽の手段を用いる工夫をしていたのである。この点を考えれば、光晴の児童文学を論じる場合、作品に描かれている「戦争」の意味をより慎重に探究する必要があると考えられる。そこで、本稿では、作品中に描かれている「戦争」に関する描写を取り上げ、発表当時の時代背景や発表雑誌の編集方針を含めて、金子光晴の児童文学作品における戦争描写の意味を再検討したい。

三、発表雑誌の編集方針

金子光晴の児童文学作品は、主に『少年倶楽部』（講談社）、『少女倶楽部』（講談社）、『婦人子供報知』（報知新聞社）に発表された。周知のように、『少年倶楽部』と『少女倶楽部』は当時の子供から人気を博し、児童文学の動きに多大な影響を与えた月刊誌である。『少年倶楽部』は大正3年に大日本雄弁会（現・講談社）から創刊された少年向けの雑誌であり、『少女倶楽部』は大正12年に発行された少女向けの雑誌である。『少女倶楽部』の創刊は『少年倶楽部』より少し遅れたものの、両誌の編集方針の変遷がほぼ同じであったため、本稿では『少女倶楽部』についての先行研究に基づき、両誌の編集方針の変遷について概要を説明する。

中川裕美は『少女倶楽部』の編集方針の変遷を創刊期（1923-1930年）、安定期（1931-1937年）、戦時下（1938-1945年）の三つの時期に分けた。『少女倶楽部』は、『少年倶楽部』の兄弟誌として創刊され、講談社の基本理念である「おもしろくためになる」という方針に従いながら、女子教育の補足的な役割を担っていた。安定期に入ると、雑誌の編集方針は教育性を重視する傾向となった。しかし、昭和6年の満州事変以降、雑誌を取り巻く環境は軍国色を強め、雑誌は軍当局の監視下に置かれるようになり、編集方針は大きく変わった。戦時下では、雑誌の役割は「勉学」から「愛国心」や「敵を撃滅する精神」の発揚へと変わった。昭和16年1月号の編集部の話からも分かるように、編集方針は政府による規制だけでなく、社会背景や読者の要望から軍国主義思想に沿ったものへと自発的に変えられていったことも指摘できる⁷。

一方、長谷川潮はアジア太平洋戦争期における『少女倶楽部』の内容の変化を詳しく分析した。具体的には、誌面に「満州事変」という表現が現れたのは昭和6年12月号からであった。また、昭和7年2月号に掲載された西条八十の詩を通じて、

当時の『少女倶楽部』が国家主義的で軍国主義的な色合いを持っていたことが分かった⁸。さらに、昭和8年には軍事的な読物や戦争記事が多数掲載され、少女読者には軍事に関心を持つことが求められていた⁹。

昭和9年から昭和12年の前半（7月7日盧溝橋事件以前）の間には、中国との戦闘を扱った軍事的な読物は誌面からほとんど姿を消した。これは、国民が中国との戦争が既に終結したと認識していたことを示唆している。しかし、実際に戦争が始まり、敵機による空襲が予想される場合には、国民に対して空襲に備える覚悟を喚起するための作品が掲載された。その後、日中戦争が勃発したため、昭和12年10月号からは「グラビア 日支事変大画報」と「日支事変感動美談集」という、直接的に戦争に関係する記事が誌面に掲載された¹⁰。

昭和13年には、戦争が長期化する見通しとなった。そのため、昭和13年5月号では陸軍大将である松井石根の文章が掲載された。松井大将の執筆は、長期戦になるという認識と国民の戦争に対する緊張感の不足に対する不満を反映していた。また、この時期には「看護婦」を中心とした読物が増え、『少女倶楽部』は少女たちを看護婦に勧誘する役割を果たすようになった¹¹。

昭和15年と16年の雑誌の内容では、「支那の少女たち」に関する話が特徴であった。さらに、少女読者に対する思想指導や思想教育を強調した文章が多く見られた。この思想教育の中心は、国の方針に積極的に協力することであった¹²。昭和17年から20年にかけて、『少女倶楽部』は少女雑誌としての文芸性や娯楽性が非常に減少した。連載小説は存在したが、通常は日本の戦争を肯定することを前提としており、自由な文芸作品はほとんど見られなかった。また、少女たちの本来の役割である学習に関連する記事などは完全に姿を消していた¹³。

中川氏と長谷川氏の分析によれば、昭和6年の満州事変以降、雑誌の編集方針は政府の規制、社

会的背景、読者の要望などの要因により、創刊時の「おもしろさ」や「勉学」から徐々に愛国心の鼓吹や国家の方針を支持する方向へと変化していったと指摘されている。この変化は『少女倶楽部』だけではなく、実は『少年倶楽部』でも見られた。さらに、昭和12年に日中戦争が勃発し、翌年には「児童読物改善に関する指導要綱」が実施されたことから、両雑誌に掲載される作品の内容はますます制限されるようになったと考えられる。

一方、講談社で野間清治社長のもとで編集された『婦人子供報知』¹⁴は、1930年代の「非常時」において日本の大衆文化に大きな影響を与え、特に女性や子供に対して顕著な影響力を持つ雑誌であった。

「創刊の辞」において社長の野間清治が下記のように宣言している。

（前略）家庭の内容は主として母、妻、子供の三者である。これ等の人々に少しでも為になることが、世の中を明るくし、正しくし、美しくする為の最善の努力であると私は確信する。

不景気を直すのも、思想を善くするのも、道徳を振興するのも、本筋は何といっても教育問題で就中効力の著大なるは家庭教育である。吾等の新たに計画した『婦人子供報知』形は小さく、頁は薄くとも、期する所は高く且つ大きい。（後略）¹⁵

つまり、『婦人子供報知』は主な読者層が女性と児童に想定されて、「母、妻、子供の三者」をターゲットとした雑誌である。それ故、『婦人子供報知』の刊行時期は1930年代の「非常時」と重なっていたが、「家庭雑誌」という性格のため、時局に関連した読み物も存在しているものの、『婦人子供報知』では軍国色はさほどに目立たないと言える¹⁶。

それでは、雑誌の編集方針は光晴の執筆にどのような影響を与えたのか。表1では、光晴の児童文学作品の発表時期、発表先、および発表作品数

が提示されている。

【表1】¹⁷

発表時期	作品数	発表先
T13	1	『少女』1
T14	7	『少年』5、『少女』2
T15	3	『少年』2、『少女』1
S2	4	『少年』3、『少女』1
S3	10	『少年』4、『少女』4、『上毛』2
S4	1	『少女』1
S6	4	『少女』4
S7	6	『少年』1、『少女』2、『婦人』3
S8	8	『少年』1、『少女』2、『婦人』5
S9	5	『少年』1、『少女』1、『婦人』3
S10	4	『少年』1、『少女』1、『婦人』1、『国民』1
S11	4	『少年』1、『少女』1、『婦人』2
S12	5	『少年』4、『少女』1
S13	5	『少年』3、『少女』2
S14	12	『少年』1、『少女』11
S15	1	『少女』1
S16	2	『少女』2

先行研究では、光晴は貧窮のために童話を書いて生計を立てていたと指摘されているが、実際にはモンココ化粧品本舗での宣伝関係の仕事を得て、月給五十円を受け取るようになったため、昭和7年の9月から生活が一応安定したと言える。したがって、光晴が作品を発表するかどうか、どの雑誌に発表するかは自身の意識によって選ぶことができたと言える。

先述の通り、昭和6年から12年にかけて『少年倶楽部』や『少女倶楽部』の内容は軍国色が濃くなっていった。一方、『婦人子供報知』は家庭雑誌の性格を持っていたため、軍国色はそれほど目立たなかった。光晴の作品は、表1で示されているように、昭和6年から12年の『婦人子供報知』の発刊期間において、ほぼ半分がそちらに発表された。光晴がこの時期に『婦人子供報知』を主要な発表先に選んだのは、雑誌の性格と関連している可能性が高いと考えられる。しかし、昭和12年以降は『婦人子供報知』が休刊したため、作品の発表先が『少年倶楽部』や『少女倶楽部』に限定

されるようになった。そのため、12年以降の作品は『少年倶楽部』や『少女倶楽部』の編集方針を考慮せざるを得なかったと言える。このことが、先行研究で指摘された昭和12年前後から戦争物が急増した理由の一つであるとも考えられる。

また、光晴の作品の発表数は昭和14年に比較的多い12篇あった。しかし、その中で戦争と関連するものは4篇しかなかった。その後、昭和15年、16年になると発表数が明らかに減少し、最終的に昭和16年の3月以降、光晴は雑誌への作品発表を完全に中止した。昭和17年から20年の間には、雑誌の編集方針が日本の戦争を肯定することを前提として要求されるようになった。この編集方針に従って戦争をテーマにした作品を書くことは、光晴に抵抗感を抱かせ、結果として彼が児童文学の執筆を断念した可能性が高いと考えられる。

四、光晴の児童文学作品における「戦争」

表2では、光晴の児童文学作品の中で、戦争と関連がある童話のリストが示されている。これらの作品は主に戦争の場面が描かれているか、戦争と深く関わりを持つものである。ただし、兵士が登場するだけで物語の筋が直接的に戦争と関連していない場合は、例として取り上げられていない。

【表2】¹⁸

発表時間	発表先	作品名	舞台
T14.8	◎	愛の勇将	欧州
S2.9	◎	アッチラの馬	欧州
S3.2	○	あゝ祖国	欧州
S3.10	◎	黒い下士官	アフリカ
S4.11	○	オランダの母	欧州
S6.1	○	愛の旗じるし	欧州
S9.1	○	大砲の献金	欧州
S11.11	○	エチオピアの黒鷲	欧州
S11.12.13	△	勇将を感激させた母の愛 敵中に只一人我が子を護る	欧州
S12.10	○	黙りん坊	欧州
S13.2	○	モンマルトルの愛国少女	欧州
S13.4	○	妹よ、いずこ	欧州

S13.6	◎	俺は日本人だ!	中国
S13.7	◎	可愛い手の水	中国
S14.2	◎	愛馬の勲章	欧州
S14.3	○	花は散らず	欧州
S14.5	○	金貨	欧州
S14.12	○	空はうるわし	欧州
S16.3	○	乙女よ雄々しくあれ	欧州
S18	※	マライの健ちゃん	マライ

表2に示されているように、光晴の児童文学作品には大正14年に既に戦争と関連した物語が登場している。前期の作品では、敵に脅されても恐れずに祖国への忠誠心や愛国心を示す少女や、戦場で自分の国のために勇敢に敵と戦う兵士、侵略された村で重病の息子を看病する母親、敵軍の傷者を世話する看護婦などが描かれている。これらの物語は戦争を背景にしているが、光晴が目じたのは戦争や戦場の過酷な状況に置かれた人々の尊い行動や心理であり、どの国でも共通の美德と言えるものである。戦争に巻き込まれた人々の人間性の美しさを強調する物語は一種の戦争美談とも考えられるが、光晴は「戦争」を称賛するために書いたのではなく、物語の世界を構築する手段として「戦争」を導入したのである。

一方、前期の作品はヨーロッパを舞台にし、時間的には主に第一次世界大戦の時期に設定されている。実際に金子光晴は大正8年2月から大正9年12月の中旬までヨーロッパに滞在した経験がある。その期間はちょうど第一次世界大戦の終結時期であり、ヨーロッパ諸国は戦争の余波の影響下にあった時期であった。前期の作品に戦争に関連する描写が導入されているのは、おそらく当時の経験や聞いた話の影響を受けている可能性が高い。

雑誌に掲載された光晴の児童文学作品では、戦争と関連した物語が昭和16年まで継続的に現れていた。しかし、昭和12年以降、このような作品の数は増加傾向にあった。これは先述した雑誌の編集方針の変化によるものであり、時局による自然な成り行きと考えられる。

しかし、戦争を作品中に頻繁に描いているにも

拘らず、作品の舞台は昭和12年以降も主にヨーロッパであり、時間的にも第一次世界大戦の時期に設定されているものが多い。物語の筋を見ると、前期の作品と趣旨は殆ど変わっておらず、ただ軍人思いの少年少女が登場する場面が前期の作品より多くなっているだけである。戦時下の厳しい制限により、作品においては多少時局に順応せざるを得ない側面も見られるが、戦争という厳しい状態に置かれた人間が自分の国、周りの人々、更に他者に対してどのような行動を取るべきか、というテーマは光晴の戦争と関連する作品で一貫して探求されている。光晴の戦争をテーマとした物語は、遙かなる時空の中で展開される戦争を通して清麗な人間性を中心に描かれているのである。これらの物語は一見すると少年少女の愛国心を鼓吹して国の政策に協力するもののように見えたが、実際には光晴自身が自分なりの方法で戦争物語を描いていたと言える。

五、結び

本稿では、金子光晴の児童文学作品における「戦争」の表現に焦点を当て、『少年倶楽部』『少女倶楽部』『婦人子供報知』に発表された作品を中心に分析した。光晴の作品では戦争に関する描写が頻繁に現れているが、作品が発表される雑誌の選択や作品数の変化を分析すると、彼が国策に協力するために作品を書くことに抵抗感を持っていたことが窺える。彼は戦争を描きながらも、戦争の苦境に立たされた人々の尊い行動や美徳に焦点を当て、これを一貫したテーマとして作品に取り入れていた。子供向けの作品は常に分かりやすい言葉と優しい文体で書かれるため、詩作のように抽象的な表現で作者の本心を隠すことはできない。しかし、光晴は戦時下の厳しい制約の中で、自分なりの方法で「戦争」を描き、独自の児童文学作品を描いていたのである。

注

- 1 成人向けの作品と異なり、子供向けの作品は特に「です・ます」調で書かれ、優しい文体が特徴となるため、読者層が明確に区別される。但し、昭和8年に『少女倶楽部』に発表された「五つの花物語」は光晴の児童文学作品の中で、唯一「です・ます」調を用いていない作品であることを断りたい。
- 2 宮澤賢治「金子光晴の童話と白秋」宮澤健太郎編『白秋研究資料集成』第10巻、クレス出版、2014年、pp.52-63。
- 3 暮尾淳「子ども向け読み物について」『金子光晴研究 こがね蟲』3、1989年、pp.56-61。
- 4 馬渡憲三郎「表現者の責任—金子光晴における「童話」の位置」『國學院雑誌』92(1)、1991年、pp.547-561。
- 5 趙怡『二人旅 上海からパリへ 金子光晴・森三千代の海外体験と異郷文学』関西大学出版会、2021年、pp.241-244。
- 6 「詩人」『金子光晴全集』第6巻、中央公論社、1976年、p.192。
- 7 中川裕美「『少女の友』と『少女倶楽部』における編集方針の変遷」『日本出版史料』9号、2004年。
- 8 長谷川潮「『少女倶楽部』とアジア太平洋戦争」(1)『論叢児童文化』37号、2009年。
- 9 長谷川潮「『少女倶楽部』とアジア太平洋戦争」(2)『論叢児童文化』39号、2010年。
- 10 長谷川潮「『少女倶楽部』とアジア太平洋戦争」(3)『論叢児童文化』40号、2010年。
- 11 長谷川潮「『少女倶楽部』とアジア太平洋戦争」(4)『論叢児童文化』41号、2010年。
- 12 長谷川潮「『少女倶楽部』とアジア太平洋戦争」(5)42号、2011年。
- 13 長谷川潮「『少女倶楽部』とアジア太平洋戦争」(6)『論叢児童文化』43号、2011年。
- 14 講談社社長の野間清治は1930年6月に『報知新聞』を買収して、「大付録作戦」を『報知新聞』に導入し、隔週誌の『婦人子供報知』を定期購読者に無料配布した。昭和6年3月11日に発刊した第1号から昭和12年2月28日に発行した終刊号まで総計143号が発行された。
- 15 『婦人子供報知 復刻版』第1巻、柏書房、2019年、p.7。
- 16 佐藤卓己『昭和戦前期報知新聞付録集成『婦人子供報知』【復刻版】解題』柏書房、2019年、p.6。
- 17 表1では、『少年倶楽部』を『少年』、『少女倶楽部』を『少女』、『婦人子供報知』を『婦人』、『上毛新聞』を『上毛』、『国民新聞』を『国民』と略して表記する。但し『マライの健ちゃん』は昭和18年に単行

本の形式で出版されたため、表1に取り入れない。

- 18 表2では、発表先の『少年倶楽部』を◎で、『少女倶楽部』を○で、『婦人子供報知』を△で、その他を※で表記する。

テキスト

- 『金子光晴全集』第8巻、中央公論社、1976年。
『金子光晴全集』第15巻、中央公論社、1977年。
『婦人子供報知 復刻版』第4巻～第8巻・第12巻、柏書房、2019年。

参考文献（年代順）

- 金子光晴「詩人」『金子光晴全集』第6巻、中央公論社、1976年。
暮尾淳「子ども向け読み物について」『金子光晴研究 こがね蟲』3、1989年。
馬渡憲三郎「表現者の責任—金子光晴における「童話」の位置」『國學院雑誌』92(1)、1991年。
中川裕美「『少女の友』と『少女倶楽部』における編集方針の変遷」『日本出版史料』9号、2004年。
長谷川潮「『少女倶楽部』とアジア太平洋戦争」(1)『論叢児童文化』37号、2009年
長谷川潮「『少女倶楽部』とアジア太平洋戦争」(2)『論叢児童文化』39号、2010年
長谷川潮「『少女倶楽部』とアジア太平洋戦争」(3)『論叢児童文化』40号、2010年。
長谷川潮「『少女倶楽部』とアジア太平洋戦争」(4)『論叢児童文化』41号、2010年。
長谷川潮「『少女倶楽部』とアジア太平洋戦争」(5)『論叢児童文化』42号、2011年。
長谷川潮「『少女倶楽部』とアジア太平洋戦争」(6)『論叢児童文化』43号、2011年。
宮澤賢治「金子光晴の童話と白秋」宮澤健太郎編『白秋研究資料集成』第10巻、クレス出版、2014年。
『婦人子供報知 復刻版』第1巻、柏書房、2019年。
佐藤卓己『昭和戦前期報知新聞付録集成『婦人子供報知』【復刻版】解題』柏書房、2019年。
趙怡『二人旅 上海からパリへ 金子光晴・森三千代の海外体験と異郷文学』関西大学出版会、2021年。